

# 本報告書の要約

## 第1章 小学生の学習行動

### (1) 好きな教科・嫌いな教科

小学5年生が好きな教科のベスト3は、①図画工作(とても好き=63.5%)、②体育(61.1%)、③家庭(57.7%)の実技系の科目。性別には、男子は体育がトップ(74.8%)、女子は家庭がトップ(71.9%)である。また、前回との比較では、図画工作と家庭が「とても好き」が大きく増えている。嫌いな教科のトップは⑥算数の25.2%(とても+まあ嫌い)で、4人に1人が算数嫌いの児童である。(図1-1、表1-1、表1-2)

### (2) 国算算理の理解度

国算算理の授業の理解度をみると、もっとも多い理科でも理解度(理解している子どもの割合)は71.3%でしかなく、もっとも少ない社会では56.5%であり、どの教科でも授業についていけない児童の多いことがわかる。特に、成績下位の児童でこの傾向が強い。また、前回調査との比較ではあまり改善がみられない。(図1-2、図1-3、表1-3)

### (3) がんばって勉強したい科目

小5の児童ががんばって勉強したい科目の1位は③算数の54.3%、2位が⑦体育の45.7%。がんばって勉強したいと思わない科目は、1位が⑤音楽の22.5%、2位が④理科の28.1%。性別には、女子では算数をがんばりたいが59.7%でトップ、男子では体育をがんばりたいが51.5%でトップである。(図1-4)

### (4) 授業の受け方

小5の教室では、授業が難しいと感じる児童(55.4%)と簡単すぎると感じる児童(35.2%)とを同時に抱えて授業が展開されている。授業中の態度では、「ぼうっと他のことを考えている(39.3%)」がやや多い。成績別の授業の受け方の違いでは、授業の難易度の評価の項目でもっとも成績ごとの差異が大きい。(図1-5、図1-6)

### (5) 家での生活時間

勉強時間は、平日は、「ほとんどしない」と「およそ30分」が3分の1。1時間台が5分の2、2時間以上が4分の1である。日曜日は、平日よりも勉強時間が減り、「ほとんどしない」と「およそ30分」で5割を超え、2時間以上が1割台の後半になる。なお、学校週5日制で休みの土曜日の勉強時間をみると、ほぼ日曜日と同じになっている。(図1-7)

### (6) 子ども部屋

自分の勉強部屋を持っている割合は36.9%。大都市では30.3%と低い割合になっている。(図1-8)

### (7) 家での勉強の内容

ほぼ全員が「①出された宿題をきちんとやっていく(94.5%)」が、「④授業で習ったことは、その日のうちに復習する(50.6%)」や「③予習をしてから授業を受ける(49.4%)」はほぼ半数。前回との比較では、「②授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」が約20ポイント増加。性別には、「①出された宿題をきちんとやっていく」で男子(46.0%)が女子(65.8%)よりも20ポイント近く下回っている。(図1-9、図1-10、図1-11)

### (8) 家での勉強の方法

家での学習は、「①嫌いな科目の勉強も一生懸命する」が78.5%、「②家族に言われなくても自分から進んで勉強する」が76.4%とがんばって、そして自主的に行っている。しかし、勉強の計画性やメリハリは必ずしもしっかりできていない。性別には、女子のほうが「①嫌いな科目の勉強も一生懸命やり(82.2%)」「②家族に言われなくても自分から進んで勉強する(82.4%)」。(図1-12、図1-13、図1-14)

### (9) 学習への意欲と感動

科目によって差はあるが、少ない科目では3分の1から5割弱の児童が学習の中であまり感動を感じない。学習への意欲(好き)については、さらに低くなっている。なお、学習から感動を感じている児童や学習の内容が好きな児童は、その教科を好きである割合が顕著に高くなる。(図1-15、図1-16)

### (10) 塾・家庭教師・通信教育その他

学校外の学習機関のうち、もっとも利用されているのは学習塾で33.0%。前回調査と今回調査の比較では、宅配教材が減少し17.9%に、通信教育が増加し24.5%となっている。(図1-17、表1-4)

### (11) 学習塾への通塾と生活時間

学習塾での学習時間は、進学塾での学習時間が「3時間くらい(42.7%)」や「4時間以上(20.7%)」と長時間になっている。進学塾通塾者は、このように塾での学習時間が長いほか、家でのテレビの視聴と睡眠時間が短い。また、補習塾通塾者は学習時間が進学塾通塾者よりも短い。塾に通っていない児童よりは長い。(表1-5、図1-18)



## (12) 進学塾への通塾と学習への意欲・関心

学習の中で受ける感動では、社会と算数と国語で進学塾通塾者のほうが感動をしていた。また、学習への意欲（好き）でも、社会と算数は進学塾通塾者のほうが学習への意欲（好き）が高い。理科は感動、意欲（好き）ともに両者の間の差は小さかった。（図1-19）

## (13) 中学受験の予定別にみた学習塾通塾率

大都市（東京区部）では、中学受験をする者のほとんどが進学塾に通うが、他の地域では進学塾に通っていない児童も多い。（図1-20）

## (14) 習い事・おけいこ事

習い事やおけいこ事では、スポーツがもっとも多く41.5%、つづいて習字が29.5%、音楽が25.3%、英語が15.1%となっている。（図1-21、表1-6）

## (15) 中学受験

中学受験をする予定の児童は17.7%。成績別には、成績上位が28.6%、中位が13.8%、下位が12.0%と成績が上位の者ほど受験する割合が増える。地域別では、大都市で28.7%、地方都市で15.8%、郡部で11.7%と受験希望率の地域差は大きい。（図1-22）

## (16) 進学希望

もっとも多かった回答は「わからない」の29.2%。そして「高校まで」が23.4%、高等教育機関（短大・大学・大学院）は合わせて33.2%。成績別の差異が大きく、成績が下位の児童ほど「高校まで」と答える割合が高くなり、成績が上位の者ほど「四年制大学まで」と答える割合が高くなる。（図1-23）

## (17) 日常生活の中での学習——日常の中での基礎と応用

日常生活の中での学習は「①読みたい本を本屋さんで探して買う（78.8%）」「②家でペットや動物・植物の世話をする（70.0%）」を除いてはほぼ5割かそれ以下となっており、あまり活発ではない。なお、「⑦虫を観察したり、虫取りをする」児童や「②家でペットや動物・植物の世話をする」児童は、それらをしない児童よりも学習への意欲（好き）や感動が高くなっている。日常生活の中での学習は、児童の教科の学習と強い相関をもっていると言える。（図1-24、表1-7）

## (18) メディアの利用

「①テレビゲームをする」が39.7%、「②家でパソコンを使う」が10.5%、その他の項目は10%以下の利用率である。メディアの利用はまだまだ少ない。（図1-25）

## 第2章 小学生の学習観・成績観

### (1) 成績の自己評価と希望する成績

児童は正規分布曲線のような割合で自分の成績の自己認識をしている。児童たちは、自分の成績を認識する機会をしっかりと（？）与えられている。（図2-1）

### (2) がんばればとれると思う成績

できることなら上位の成績をとりたいと希望する児童が84.5%。非常に高い水準の欲求を示している。努力すればどのくらいの成績がとれるかは、81.1%の児童が上位と答えている。この値は希望する成績の84.5%とほぼ同じである。児童は自分の可能性を強く信じている。ただしこの値を成績別にみると、成績下位者では、55.3%と低い。（図2-2、図2-3、表2-1）

### (3) よい成績をとるために大切なこと

よい成績の要因として「①努力」が96.7%、「⑤授業をしっかりと聞く」が95.8%、「⑦人に負けたくないという気持ち」が82.0%となっており、努力・勤勉・気持ちの3つが成功の要因とされている。（図2-4）

### (4) よい成績をとるためにもっとも大切なこと

「今のあなたにとって」と具体的に尋ね、しかも複数選択ではなく単一選択にしても、ベスト3はやはり「努力」が56.4%、「授業をしっかりと聞く」が15.2%、「人に負けたくないという気持ち」が6.7%と続いている。この努力・勤勉・気持ちの3つで78.3%を占めている。成績別には成績上位者のほうが「努力」を選ぶ者が多く、「家族の協力」や「運」が少ない。（図2-5、表2-2）

### (5) 幸福観——幸福になるためには

「①いい友だちがいると幸せになれる」が89.6%。そして「②いい大学を卒業すると幸せになれる（59.9%）」はそれより30ポイント近く減って6割ほどになる。「③お金があると幸せになれる（49.4%）」は①より40ポイント減って約5割になる。また、進学塾通塾者のほうが「②いい大学」を選ぶ割合が高く、非通塾者のほうが「③お金」を選ぶ割合が高い。幸福観の組み合わせでは、成績上位の児童ほど「①友だちと②いい大学と③お金」を選んでいる。なお、成績上位と中位で「①友だちと②いい大学」が多く、成績中位と下位で「①友だちと③お金」が多くなっている。（図2-6、図2-7、表2-3、表2-4、表2-5）

### (6) ジェンダーと学習観

「①女子は勉強をがんばらなくてもいい」は16.5%。そして男子（21.7%）のほうが女子（11.3%）よりもそう思っている。（図2-8）



### (7) 学習上の悩み

勉強方法では「①上手な勉強の仕方がわからない」が34.6%。学習内容では「③どうしても好きになれない科目がある」が65.7%。学業達成・競争では「⑤もっと成績をよくしたい」が78.2%と非常に高い値。「⑥勉強で友だちに負けたくない」も55.2%であり、友だちの競争相手化がみられる。成績別には、勉強方法や学習内容については、成績下位の者ほど悩んでいる割合が高い。また、学業達成・競争については、「⑤もっと成績をよくしたい」は成績上位が71.8%に対して下位が83.2%と下位のほうが悩んでいる児童が多い。反対に、「⑥勉強で友だちに負けたくない」では成績下位が50.3%に対して上位が61.4%と上位のほうが悩んでいる児童が多い。学習の目標喪失については、成績上位者の8.0%に対して下位者は14.9%で、下位者のほうがやや悩む割合が高い。(図2-9、図2-10)

## 第3章 比較分析 小学生、中学生、高校生の学習行動と意識の比較

### (1) 教科の好き嫌いと理解度

各教科を「好き」と答える者は小学生でもっとも多く、中学生、高校生になると減少する。教科別にみると、変化が小さいのは社会で、反対に変化が大きいのは理科である(図3-1)。その原因とも考えられる授業の理解度は、小学生から高校生にかけて段階的に低下する。理解度の低下が特に著しいのは理科である。(図3-2)

### (2) 家での勉強

小学生から高校生になるにつれ、家での学習機会は平日から休日へと移行している(図3-3～図3-5)。中学生と高校生の家での勉強の種類を比べると、高校生は学校の授業を中心としたものであり、中学生は学校と学校以外の学習機会を併用したものである。(図3-6)

### (3) 学校外学習機会の利用

学校以外の学習機会の利用率がもっとも高いのは中学生である。高校生の利用率は小学生より低い。一方、学校が提供する正規の授業外の学習機会(補習授業、学校の夏期講習)の利用率は高校生が中学生を上回る。(図3-7)

### (4) 勉強の仕方

高校生と中学生の勉強の仕方を比べると、高校生の勉強の仕方は①試験の前にまとめて勉強する、②学校で使う教材中心、③できるだけ考えようとする、④自分で整理しながら勉強する、⑤予習中心、⑥やさしい問題を数多く解く、という特徴がある。(図3-8)

### (5) メディアの利用

学校や家庭でのメディアの利用率は高校生がもっとも低い。学校でのパソコン利用率がもっとも高いのは中学生であり、半数近くが利用している。(図3-9)

### (6) 成績観

現在の成績の自己評価は、小学生が中学生、高校生に比べて「真ん中」に集まる傾向にあり、学校段階の上昇とともに成績の序列が明確になっていくことがわかる(図3-10)。「どのくらいの成績がとれたらいいか」(図3-11)、「うんとがんばればとれる成績」(図3-12)では、小学生と高校生は上位に集中するが、中学生はやや控えめである。なお、よい成績をとるために大切なものについては、小学生、中学生、高校生ともに「努力」と答えた者が半数以上を占めた。(図3-13)

### (7) 学習観

#### a) 一生懸命勉強することの効用

勉強することが、①社会のために役立つことをするのに、②尊敬される人になるのに、③精神的に豊かな生活をするのに、④よいお父さん、お母さんになるのに、⑤趣味やスポーツなど楽しく生活するために役立つと答えた者は高校生よりも中学生のほうが多く、高校生のほうが勉強の効用を限定的にみている。(図3-14)

#### b) 勉強をしていて感じること

勉強をしていて「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる機会は、小学生には多いが、中学生になると減少する。学校段階の上昇とともに、勉強から学ぶことが限定的になっていることがわかる。(図3-15)

### (8) 学習上の悩み

学習上の悩みは、学校段階に応じて変化する。小学生の悩みは「どうしても好きになれない科目がある」ことであり、中学生の悩みは「頭の悪さ」や「努力が報われない」など、自己の能力に関連する。高校生の悩みは「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」など、学習内容に対する疑問にある。(図3-16、図3-17)